

会話から生まれる笑顔

香南市立野市小学校六年 田村虹琴

私は、初対面の人とても気軽に話すことができる方です。でもなぜか、海外の人が相手だときんちようして固まってしまいます。その行動が無意識のうちに相手を傷つけていると気づいたのは、海外の友達ができてからでした。

三年ほど前、弟にバン格拉デシュ人の友達ができしました。それから、時々、私達を呼んでくれてバン格拉デシュの料理でもてなしてくれます。最初に、母から、「行くよ。」と言われたときには、聞いたことのない国だったので、「すごく行きたい。」とは、なりませんでした。弟と妹は、すぐにうちとけて仲良く遊んでいるのに私は、自己紹介だけしてほとんど話さず固まっていました。すると、その友達のお母さんが、私の母に、こんなことを言っているのを聞いてしやうげきを受けました。

「初めて日本人の友達ができた。」

「家族で公園に行っても、誰も話しかけてくれない。きっと私達は、こわがられているんだと思う。」

私は、この話を聞いて、初めて相手の気持ちに気がつきました。さらに、今まで、自分のことしか考えていなかったことにも気がつきました。

このような体験で、さみしい思いや、悲しい思いをしている海外の人が、他にもいるかもしれないと気になり調べてみることにしました。法務省の日本で暮らす十八才以上の外国人を対象に行った調査によると、在留外国人の五十六・一パーセントの人達が、日常生活の中で、「差別を経験した」と書かれています。身の回りにそんなにたくさん差別はないと思っていたけど、もしかしたら、友達のような経験をしている人もこの中にいるのかもしれないと思いました。

それから、何回もその友達の家に行くよう

になりました。家に行くと、いつもたくさん
のバン格拉デシュの料理を作ってくれます。
私は、いつも作ってくれる、落ち着くような
味の料理が好きです。日本のものとは違う形
と食感のお米や、スパイスの効いた料理があ
ります。豚肉は食べないので、ハムやソーセ
ージも食べないそうです。とっても辛い物が
好きだそうです。私達が行ったときは、私
達に合わせてくれて辛くないようにしてくれ
ます。それでも、私にとっては、すごく辛く
感じて、

「辛ーい。」

「辛くないよ。」

の会話でよく盛り上がります。

それから、何回も家に行くうちに、馴染み
のなかった文化にも馴染めるようになってまし
た。例えば、手でご飯を食べるということで
す。いつも、私達のために、スプーンやおは
しも用意してくれているけど私は、手で食べ
てみようかと挑戦しています。なぜなら、

「手で食べた方がおいしいよ。」

と教えてくれたからです。最初は、手で食べていると、食べ物落ちて難しかったです。

でも今は、手で食べるのにも慣れてきました。

同じように、手で食べる国の人達にとっては、おはしで食べるのが難しく食事もしみにくいということに気がつきました。

また、時々バン格拉デシュの言葉を教えてくれたりもして、どんどん会話がはずむようになり仲良くなりました。バン格拉デシュ語、英語、日本語の交じった会話です。

交流を重ねていくうちにテレビでバン格拉デシュのニュースが出てきたら心配になったり、気になったりするようになりました。逆に、私がよさこいをおどるときには、見に来てくれたり、いつも私達のことを応援してくれたりします。

交流すること、外見からは、わからないやさしいところなどが見えるようになりました。言葉が、通じ合わなくても一緒に過ごす

ことで分かり合えることがあると気づきました。

こういった経験から、ちがうから話しかけないのではなく、ちがうからこそ話しかけてみようと思う自分に変わることができました。今は、いろいろな人に出会えることにわくわくしています。私は、この気持ちをもつてまるで新しい世界に飛び込むように話しかけていきたいです。そして、もっと交流を広げ、「笑顔の輪」も広げていきたいです。